

京都府京丹後市における地域拠点がコロナ禍の中で取り組んできたこと

京都府推薦都市農村交流アドバイザー（分野：合意形成）

東 田 一 馬（つねよし百貨店 マネージャー）

1 拠点の概要

つねよし百貨店は、京都府京丹後市大宮町上常吉区にある「よろずや」で、全国的には「日本一小さな百貨店」として知られてきました。ソーシャル・ビジネスの先駆けとして高く評価された常吉村営百貨店の志を継ぎ、2012年に開店しました。商店として営業しながら、過疎地域の農家や高齢者の暮らしを支え、地域のコミュニティセンターの役割を担っています。（wikipedia「つねよし百貨店」より）

つねよし百貨店には、商店とコミュニティセンターという2つの顔がありますが、それぞれ、地域の食を守り、暮らしを支えるという役割と、人と人とのつながりを作り、豊かな暮らしに貢献するという役割を担っています。

2 具体的な取組内容

つねよし百貨店では、これまで百貨店のフリースペースを開放し、地域住民はもとより、地域外の人との交流であったり、イベントやサロン活動など、地域、世代、職業、国籍を超えて人と人をつなげてきました。「ここに来れば誰かに会える」つねよし百貨店は、そんな場所を目指し、日々運営を続けてきました。食べることと違い、人と交わらなくても生きていくことはできます。

それでも人と出会い、つながることは暮らしをより豊かにしてくれます。これまでも、つねよし百貨店では人が集まり、つながれる取り組みを数々行ってきました。ジャンボカボチャの重量を競うパンプキンフェスティバルを始め、映画祭、落語会、コンサート、ボードゲーム会など、みんなが集まれる場として利用されるならどんなことでもやってきました。また、海外や都市部からの学生、企業などのフィールドワークの受け入れにより、地域内外の人々をつなぐ役割も担ってきました。

3 コロナ禍によるコミュニティの変化

しかし、2020年、新型コロナの流行により社会は一変しました。人が集まる場所、集まっていた場所は誰も集まれなくなったのです。買い物の場としてのつねよし百貨店の役割は残りましたが、コミュニティとしての役割は停止しました。集まりたくても集まれぬ。

コロナ禍が社会に与えた影響の大きさは改めて言うまでもありませんが、中山間地の小さな集落の小さなお店のコミュニティにもコロナ禍は大きな影響を与えたのです。コミュニティスペースを利用した取り組みも控え、外部との交流もなくなりました。2020年の1年間は、つねよし百貨店にとっても我慢の一年でした。

4 アフターコロナに向けた取組

2021年を迎え、まだコロナ禍に収束の気配はありませんでしたが、この未曾有の災禍の中、人が集まるだけではないコミュニティの形、アフターコロナに向けての新しいコミュニティの姿について百貨店としても模索を始めています。

元来、つねよし百貨店のコミュニティスペースは、大人数が集まってイベントをするというよりも、誰もが買い物のついでなどにふらっと立ち寄れる気軽な場所としての役割がメインの場所でした。必ずしも人と出会わなくても、自宅や職場、学校とは別の居心地のいい場所、いわゆるサードプレイスとして、現在は1日ワンコインで誰でも自由に利用できるコワーキングスペースとして開放しています。地元の方だけでなく、出張や旅行などで丹後を訪れた方が作業をしたり、地元の情報を得たりするためにご利用頂いています。

2月からは本棚を設置し、寄付頂いた本や、本棚オーナーに登録頂いた方の本を並べ、コワーキングスペースで自由に読んでもらったり、地域の方に貸し出しをする「まちライブラリーつねよし百貨店」をスタートしました。3月には地元の方から不要になった古いピアノを頂き、「百貨店ピアノ」として、どなたでも自由に弾いてもらえるようお客様に開放しています。このように、直接のつながりがなくても、本や音楽を通じてのつながりなど、新しいコミュニティの形によって孤立化を防ぎ、地域の豊かな暮らしづくりに貢献できるよう百貨店という場で試行錯誤しています。

5 アドバイザー自身のPR

東京、米国で20年間IT関連企業に勤め、2009年より一転、京丹後市の小さな集落に拠点を移しました。「バーチャルなつながり」から「リアルなつながり」へシフトし、この10年地域コミュニティのあり方を模索してきました。地域で暮らす目線から、リアルもバーチャルも含めた理想のモデルコミュニティの構築と展開を目指しています。

